
よわいいきもの

千鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よわいいきもの

【Nコード】

N4933N

【作者名】

千鳥

【あらすじ】

nintendodsのゲーム、ゴーストリックの2次創作です。ネタばれ多いにあります。例の10年が気になって気になって書いてしまいましたとさ。

（前書き）

D Sのゲーム『ゴーストトリック』のクリア後、ネタバレ小説です。
クリアしてない方、未プレイの方はご遠慮ください。

私は昔、弱い生き物だった。

だれからも顧みられることなく、だれからも必要とされず、まるで最初から存在し得ない幽霊ぐらい無視された存在。

「だれか僕を……」

見て欲しい、話して欲しい、相手をして欲しい。

だれかに必要とされたかった、幼い頃の私。

バンッ！

大きな音。

「とまれ！……ムリだよキミ。逃げられると思っているのか？」

「……」

銃を構え逼迫した公園でも私にはその緊迫感も殺意もわからなかった。

幼かったただけではない。

幼い頃の私の世界は、いつも銃をつきつけられているようなものだった。

犯人が人質をとつてる公園も道ばたも私には同じようなものだった。世の中は殺意に満ちあふれていた。

「にゃうん」

「な……なんだ仔ネコくん。そんなとこにいると怪我するぞ」

それが私にかけられた最初の言葉。

それから、空が真っ白に燃えた。大きな音がした。地面がゆれた。なんとなく、私は死ぬんじゃないかと思った。

私の目の前にいる黄色い髪の男は死んでいるようだった。

少し前まで赤毛の少女に銃をつきつけていたサングラスの青年。

彼は死んだように、私には見えた。それでも当時の私はとても弱い存在だったのだ。

「だれか僕を……」

最初に私に声をかけてくれた大柄の男は少女とともにいる。私を見てくれない。私はだれかに見てもらいたかった。死んで人間でもよかった。

「だれか僕を……」

求めていた私は次の瞬間、いままで経験したこともないものに包まれる。

「オレを呼んだのはお前か」

「僕は……」

再度いう。

私は当時とても弱い存在だった。だれかの手を探し求める、小さな仔ネコだった。

そんな私のなかに奴がはいってきた。

私の小さな身体の中に入ってくる。

あまりに弱い存在、あまりに弱い心の中に割り込んでくる。

無実の罪に問われ、絶望にうちひしがれ、少女に銃をつきつけた男の魂が私の中にはいつてくる。記憶はなくとも男の怒りや絶望や思慕、そして後悔や当惑が私の小さな体のなかに入ってくる。

「みやああ」

私は追いつめられる。

自分の身体の中かで私は自分を見失う。弱かった仔ネコの私にあの男、ヨミエルの魂と共生することは難しかったのだ。

私の自我は、私の心は、私の魂はとても弱く儚かった。自分の中で消え去ろうとしていた。

私は私のなかで私を見失う。

私の体を動かすのはヨミエル、私がなにをするのか考えるのもヨミエル。当時の私のような小さな存在が消え去るのは至極当然のことだ。

私は私の中で消えていく。

そして少しづつ、ヨミエルは自分を取り戻していく。

取り戻しながら、私の存在にも気付いてくれる。

急いで自分自身の身体を取り戻すため、警察署の霊安所に小さな黒猫が忍び込む。

扉がひらいて、私の目の前に黄色いとがった髪のスングラスの男、赤いスーツの男。

ヨミエルがいた。

「大丈夫か？ネコ……」

「……」

私は返事ができるような状態ではなかった。体はちゃんと動かし、食事もとっていた。だが私の心はあまりに疲弊していたのだ。

さまざまな感情をもつ人間、そのなかでも無実の罪にとわれたヨミエルの想いは私の弱い心には耐えられなかったのだ。

「死ぬなよ、ネコ」

彼は私を抱いて警察署をあとにした。私を見捨てることなく、その腕に抱いてくれた。

ずっと求めていたものを私は死にかけてになって手に入れたのだ。

「だれか僕を……」

「死ぬな、いいな。絶対死ぬんじゃない」

私がああ頃ほんとうに欲しかったものは、さしのべてくれる手。私を抱き上げてくれる腕。

私はそれを手に入れて幸せだった。

けっして嘘ではない。私は幸せだった。

ヨミエルは私に様々なものをくれた。

名前もくれた。シセルという名前を私は気に入っている。なにしろヨミエルがくれたものなのだ。嬉しくないはずがない。

急いで警察署にいき身体を取り戻したのは、なにも私のためじゃない。もうひとりのシセルのためだと知っても、私には関係ない。シセルと呼ばれるのは好きだった。そう呼ばれるたび彼がどこか悲しい表情するのに気付いても、私は彼にそう呼んでもらいたかった。

「シセル」

「にゃあうん」

私にとって幸せな日々。

私にとって幸せな10年。

求めていたものを手に入れた幸せな期間。

彼は私にはさまざまなものをくれた。

食事や水は当然のごとく羽のついたオモチャ、旅行にいくときの手提げバック、のみとりシャンプー、マイクロスコップとやらに似ている爪切り、またたび、藤のテーブルで爪を研いでは爪研ぎ板も買ってくれた。首に赤いリボンも買ってくれた。このリボンはどんなに動いても外れない、ちゃんとプラスチックの留め金がついているのだ。断じて布切れを巻いただけではない。

そしてこれは私の想像に過ぎないのだが、彼が私にくれた最大のものは魂だと思う。いや、これは私の想像というより私の要望だ。

そうあつて欲しい。

10年という月日。

彼が日に日に闇に染まり歪んだ計画をたて高笑いしているとき。私は申し訳ない気持ちになっていた。

私は弱かったばかりに、彼の魂の圧力に耐えきれなかった。そんな私を救うためにヨミエルはきつと私に魂の一部を分け与えてくれたのだ。

彼の魂の、おそらく穏やかなる側面を。私は彼から奪ったのかも知れない。

ヨミエルは公園で歌を歌う青年を見ていた。ヨミエルはレストランでカレーを頬張る男を見ていた。

ヨミエルは住宅地で夜、母親の誕生日プレゼントを仕掛ける娘を見ていた。

「仕掛けの部分なら、たやすいものだ」

言い訳をするつもりはないが、私はやめて欲しいと思っていた。言葉が通じるのなら、ヨミエルにこんなことをしてほしくはなかった。

だがネコの私には泣くことしかできなかった。

「にゃーにゃー」

「うるさいぞシセル」

そんなことはやめよう。私と一緒にいる、この時間が、そんなに不満だったのかヨミエル。

いまさらキミを追いつめた人を追いつめてどうする。なんにもならない。お腹が空くだけだ。私の声をきいてくれヨミエル。

「にゃーうー」

大きな音がした。この音がするとヒトが死ぬ。短い女性の悲鳴、子供の泣き声。男の叫び。

ああヨミエル。キミはどうしてそんなに笑っていられるんだ。嬉しそうに笑えるんだ。私がキミの魂の柔らかな部分を吸い取ってしまったばかりに。

キミはなんて恐ろしいことをする男になってしまったんだろう。

子供に母親の死に様を見せるなんて。

私に手をさしのべてくれたキミはもういなくなってしまったのだろうか。

弱いものを守ってくれたキミはもう戻ってこないのだろうか。

それでも私にはヨミエルしかいなかった。

私は10年ヨミエルの側にいた。

「シセル」

「にゃあうん」

私の名前を呼ぶたび堪えるような表情をするキミ。どうしてそんなに私の名前を呼ぶのが苦しいのか？聞くことはできない。

わからない。

わからないまま、私の幸せな10年は過ぎていった。

多くの人を傷付けるヨミエルを見ていながら、それでも私には幸せな日々。

まるくなって眠る。

あたたかい場所で私を守ってくれる腕を信じて、私にとって幸せ

な日常。

その日。

ヨミエルは私を呼んでバツクを見せた。

「大人しくしてろよシセル。いい子だから、今日はいいいというまで泣くんじゃない」

「……」

鳴くなと言われたので私は鳴かない。

私は小動物のなかでも相当頭のキレる方なのだ。

バツクのなかにいれるためヨミエルが私を抱き上げる。

「白髪が増えたな」

その頃ヨミエルは私をなでるたび、そう言った。シラガがなんなのか私はよく知らない。

「ネコの10歳じゃ白髪も増えるな。黒猫だから目立つしな」

「……」

彼はやはり苦しそうな耐えるような表情をしていた。私の名前を呼ぶときのような。

「死ぬなよ、シセル」

「……」

鳴くなと言われたから私は鳴かない。

鳴かずにただ聞いていた。見ていた。苦しそうなヨミエルを。

「俺をおいて絶対に死なないでくれシセル。外国にいつてお前は俺と暮らすんだからな。普通の暮らしを、普通の人間として死ぬ俺を看取ってくれ、シセル」

「……んにゃ」

鳴くなと言われたのに私はつい鳴いてしまった。

彼のなかに柔らかいものが蘇りつつある。彼はきつと昔と同じものを手にしようとしている。

私が奪ってしまったヨミエルの魂の優しい側面が戻ってきてるの

だ。私の老化とともに彼の魂に戻りつつある。

彼は私を抱きしめてくれた昔と同じように、よわいいきものを守る優しさが帰ってきている。

私がそう気付いたことを知らせたかった。知らせなくてはならなかった。

怖いことをしなくても、大きな音を鳴らさなくても私はヨミエルの側にいる。

私が死ぬなんてバカな話だ。

ヨミエル、キミは死んでも戻ってきたじゃないか。あの公園で。たしかに死んだキミを私は見た。そしていまキミがここにいる。

死んでも戻してくれたらいい。

私が死んだら戻してくれたらいいんだ。

だからこんな恐ろしいことはやめよう、ヨミエル。

キミの心が昔と変わっていないのなら、これが愚かなことだってわかるだろう？ヨミエル。

私はバツクのなかで暴れる。ヨミエルに叱られる。それでも私は私の言葉を伝えたくて訴えかける。何度も何度も、ヨミエルに言う。もう大きな音になって、だれかが泣いたりするのはイヤだ、ヨミエル。

「にゃーんにゃんにゃあぁ！」

私が死んでも戻る。キミが死んだら戻す。だから他人を傷付けるのはやめよう、ヨミエル！

私はネコだ。しかも10歳の高齢猫だ。

ひとしきり騒いだら眠っていたようだ。

そして私はリンネにあう。

彼女が死ぬ4分前にモドル。トリツイて、アヤツツて、死の運命を書き換える。

なにも覚えていなくても、私はリンネにひかれるものがあつた。間違つたことをしようとするジヨードをなんとか正しい道に戻そうとするリンネは、私のしたかったことと重なる。私も間違つたこ

とをしているヨミエルを正しい方向に導きたかった。

私とリンネはたった一夜の相棒。だが10年越しの相棒。

「また会えたね」

そう言われたとき私はとても嬉しかったのだよ、リンネ。

キミの迷うことない真実への情熱が私を導き、そしてヨミエルを救うことが出来た。

どれだけ感謝してもしきれない。

もちろん小さくて老獪な小動物クンにも、だ。

新しい現実で、あの恐ろしい10年を知ってるのはジョードとヨミエルと私だけ。小動物クンは10年前には存在していなかったこともあって、記憶が曖昧だ。

カバネラ刑事をリンネの自宅によっこそっ！と迎えてから、私がいま世話になってるジョード刑事の家に来て。

小動物クンは私に近付く。

「よくわかりませんが、お久しぶりですッ！シセルさん」

「よくわからないのなら挨拶も必要ないだろう」

「よくわからないんですけど僕はシセルさんと相棒だった気がします」

「キミがそう思うのなら、そうかも知れないな」

「お聞きしたかったです。僕、昔はリンネ様やカノン様とお話は出来たような気がするんですが今は出来ないんです。あなたならなにかご存知なのではないのですか？」

相変わらずバカなんだか愚かなんだかわからない小動物クンだ。

「この現実で2人は死んでいない。つまりコアがない。そしてキミにも死んだ過去がない、コアがない。つながらないのだから会話もできないのだ」

「ジョード刑事も、ですか？」

「ああヨミエルもな」

この現実で死んでシシャの力を用いて甦ったものはいない。つまりコアを持つものはいないのだ。

「あなた以外には？」

相変わらずこの小動物クンは……。

「僕が死ぬときリンネ様をなんとか説き伏せて、あなたの側に行きますよ」

「……キミは吠えることしか出来ないんじゃないのか？」

「吠えることと説き伏せることはほぼ同義ですものッ！」

いや違うと思う。

「……」

深い闇と孤独、そして絶望がヨミエルを間違った道に誘った。私も間違った方向に歩む可能性はあった。だがそれがいままさに霧散する。

「礼を言うべきかな」

「リンネ様とお話ができないのなら、吠えて理解して下さるのかさっぱりわからないので。成功してからお礼をいただきますッ！そりやあもうたつぷり頂きますともッ」

やっぱり同義じゃないんだな。

それでも救われる。

「ヨミエル様は一緒にいるから、不肖このミサイルめが、ご同行いたしますと」

「ああ……」

ヨミエルは私と一緒にはいてくれない。私の姿が10年変わらなないと知れば、彼はきつと苦しむだろう。だが、それこそ私が説き伏せてみせる。言葉が通じなくても、今度こそ私は彼に伝える。

言葉がつづじなくても伝えてみせる。

「ヨミエルが苦しむ必要はもうない」

私の名前を呼ぶたび、心を痛めていたヨミエルはもういない。

ヨミエルには彼がずっと求めていたシセルがいる。私ではないシセルが。

「お会いにならないのですか？」

「わからないのだよ」

「はい？」

私は私と同じ名前をもつ、人間の女性。彼女を見て私はどう思うのだろう。

ネコは嫉妬深くないというが、私にはいまいち自信がもてない。私は彼女の前で、この10年の月日で進化した力をもって、なにかしでかすのではないだろうか。

私にはわからない。

「頼んだぞ、小動物クン」

「はい？」

「私のことを頼んだぞ。私が間違ったことをしようとしたら、ちゃんと止めてくれよ」

「そりゃあもう、精一杯吠えさせていただきますともッ！」

「……」

はたしてそれに効果があるのか。でもそれで救われる。心から救われる。魂の深い部分が凪いてささやく。

そうか。

私はいまだ弱い生き物なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4933n/>

よわいいきもの

2010年10月9日01時38分発行